伝鳥取・大日寺出土の瓦経

難波田　徹

はじめに

天台宗寺院大日寺の裏山から瓦経の出ることは相当有名である。瓦経発見の位置は現大日寺境内から約一丁許り上った山の中腹で付近には五輪塔が多数並んでいる。遺物は大日寺に一括保存されたはずであったが、近時処々に散じたようである。付近の三徳山三仏寺にもここから出たという瓦経をもっていた。

これは、『瓦経の研究』[1]のなかで石田茂作氏が鳥取・大日寺瓦経についてふれられた遺跡と遺物の概要である。この大日寺瓦経については、『鳥取県史』や『倉吉市史』でも重要な遺物であるにもかかわらず、ただ注目されるとのみ指摘されるにとどまっているのは以上のような理由によることは言うまでもない。この大日寺瓦経は、これまでに出土した瓦経のなかでは紀年銘が最も古い延久三年（一〇七一）ということで注目されてきたが、出土したのが古いということもあって諸家に散佚してしまい、今となってはその全貌を理解することができなくなってきている。勿論こうしたことは大日寺瓦経に限らず、天仁二年（一一〇九）の徳島・犬伏瓦経、永久二年（一一一四）の福岡・飯盛山瓦経、承安四年（一一七四）の三重・小町塚瓦経など、紀年銘瓦経として重要な遺物のほとんどが諸家に散佚してしまっているのが現状である。一般に小町塚瓦経といわれているが、これなど出土地そのものも判然としておらず、菩提山、天神山などともいわれているが、瓦経としては同一のものを指しているのである。これまで瓦経についての研究が経塚研究のなかで比較的少ないのは、遺跡にしろ遺物にしろ、こうした状況であることが関係しているかも知れない。これまでに瓦経の出土した遺跡として確認されているのは二十五、六ヵ所ということであるが[2]、このうちで学術的な発掘調査が行われたのは、岡山・安養寺瓦経ただ一つということにも関わっているようである[3]。さらに従来出土した瓦経についても完形品で出土することはあまりなく、その多くが断片で出土することもあって、その基礎的な作業である経典名などを復原するのにかなりの時間がかかるということにも関係している。瓦経の研究をたちおくらせている要因はかなりあるが、こうした状況のなか

で最近の網干善教氏の一連の研究は注目される。特に網干氏の「伯耆大日寺出土の瓦経について」[4]は、大日寺瓦経を扱った最初の本格的な論考であり、小町塚瓦経[5]にしても重要な遺物を取り上げられ、復原的な研究を精力的にすすめられている。

本稿では、この石田、網干両氏の研究をふまえて本館蔵の瓦経の復原的な研究を行おうとするものである。本館蔵の瓦経としては、京都・今熊野瓦経、樫原盆山瓦経、福岡・飯盛山瓦経などがあるが、本稿で取り上げる瓦経は、「瓦経類断片　出土地不明　三十八枚」[6]であり、この出土地不明の瓦経が大日寺瓦経の一部であることを証明することにある。

(一)

従来の瓦経研究で明らかにされたことで最も重要な指摘は、瓦経塚の築造が平安時代後期のなかでも特に時期を限って行われたということがあげられる。これまでに知られた紀年銘の瓦経で最も古いのが延久三年のこの大日寺瓦経であり、新しいのが承安四年の小町塚瓦経で、石田氏はこのことについて、この延久三年が仏教界でいう末法の世にはいって二十年を経過した時であり、承安四年の翌年に法然が浄土宗を開宗しており、こうした限定されて築造されたことに注目されたのである。[7]発見された紀年銘瓦経は九例ほどあるが、いずれもこの延久から承安の百年間におかれる時期のものである。これ以外のものもこの時期に限定して考えうる一指針となるかも知れないが、こうしたことは、瓦経の規格や書風なども検討する必要があろう。ここではまず三十八片の瓦経の品質形状をみるまえに、従来明らかにされた大日寺瓦経について要約することからはじめたい。

石田氏が明らかにされた大日寺瓦経の特徴のなかで一番注目されるのは、他の瓦経と異なり数形式の大きさが混在していたことである。いずれも書写経典ごとに規格がかえられていたようであり、このことは後の瓦経の規格がほぼ同寸法で製作されたことを考えると、今日でこの大日寺瓦経が最も古い紀年銘の瓦経―初期的なものとしてその規格からもうなづかれよう。さらに大日寺瓦経の罫線についても四種類ほどあったことが明らかにされている。これは本稿の(二)以下で詳細に検討するが、あたりをつけたものに沿って書写されたもの、縦線刻横線墨書、縦横ともに線刻、縦横ともに墨書、という四分類であるが、こうした罫線の複雑さも後の瓦経の罫線からみれば特異である。小口などにつけられた丁付にしても後の瓦経と比較すると丁寧である。「初大日第一之十二」、「理趣之一」「蘇悉地中之十」、「金剛頂上之一」「二之十三」「四之五」「无之十四」「普之十一」「阿弥陀経第三」などの刻銘を石田氏は提示されるが、こうしたことから大日経、蘇悉地経、金剛頂経、阿弥陀経、理趣経、妙法蓮華経、無量義経、観普賢経などの経典が陰刻されたことも明白になる。石田氏はさらに経典内容から経文の復原的研究を行い、埋納された瓦経の総数についても、大日経一二二枚、蘇悉地経八五枚、金剛頂経四十枚、理趣経七枚、阿弥陀経四枚、妙法蓮華経一三九枚、無量義経一六枚、観普賢経一四枚の計四二七枚であったということを復原されている。この総枚数は現在のところ兵庫・常福寺瓦経の四八九枚につぐものである。製作年代については、願文の銘文や、大日経巻第六の一四枚目の欄外にある「延久三年辛亥五」とか、妙法

蓮華経巻第八の一四枚目の欄外の「延久三年才次辛亥二月十五日」とか、蘇悉地経巻上の二八枚目の「延久三年辛亥五月十日書写已畢勧進成」とかあるので、延久三年（一〇七一）の二月から五月にかけて書写造顕されたと証明されたのである。[8] 石田氏の明らかにされた大日寺瓦経は以上のことにつきるが、本稿で取り扱う出土地不明の瓦経三十八片は大日寺瓦経の特徴をそのままにもっている。結論的にいえば、この三十八片の瓦経は大日寺瓦経だということであるが、最古の紀年銘を有する大日寺瓦経の研究が、最近の網干氏の一論考しかなく、その全貌を理解するのには重要な遺跡および遺物にかかわらずかなりの時間が必要であるので、本稿では瓦経そのものの品質形状を中心に論述し、経文を復原することに主眼をおき、さらに瓦経の規格の問題、書風などについても考察するが、今後の大日寺瓦経の研究に少しでも資することがあれば幸いである。

(二)

経典内容によってこの三十八片の瓦経を分類すると、最も多いのが大毘盧遮那成仏神変加持経（以下大日経という）が十三片、蘇悉地羯羅経（以下蘇悉地経という）が八片、妙法蓮華経が七片、金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経（以下金剛頂経という）が四片、仏説阿弥陀経、無量義経が各一片、胎蔵界曼荼羅が一片、経文不明二片の計三十七片である。このうち妙法蓮華経の断片が一片接合されたので一片減となっている。経文不明の二片については残る経文が二〜五字ということでどの経典にあたるのか確認できず、今後の研究に俟つことになる。なお経文の校合は、高楠順次郎編の『大正新脩大蔵経』に拠った。

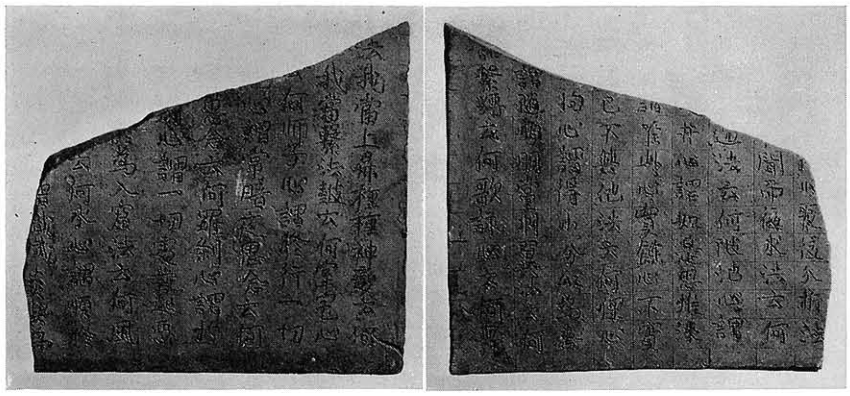
大日経は巻第一が三片、巻第二が一片、巻第三が一片、巻第四が二片、巻第五が一片、巻第六が二片、巻第七が三片と、それぞれの巻にわたっていることが判明した。

(1)の表面については縦横ともに縁にあたりをつけ罫線が縦、横の順序でひかれる。この縦と横の罫線でつくられた枠のなかに経文が陰刻されるが、枠を無視しているところもある。裏面は縦の縁のあたりはなく横のみであるが、罫線は縦横ともにひかれている。表裏ともあたりをつけ即罫線がひかれている。残りの最大縦一四・六センチ、横一五・八センチで、厚は平均すると一・五センチをかぞえる。瓦板がすこしカーブしている。下欄外幅は裏は特につくらず、表は〇・八センチである。左右欄外幅は表一センチ、裏〇・七センチである。行間の幅は表裏とも一・六、一・八、二・〇センチなど一様でない。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。ゴチック体が残る経文（以下同じ）であるが、表の経文は、

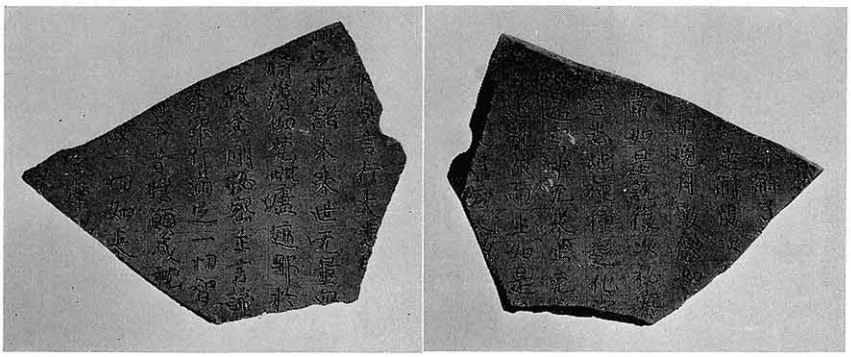
如意云何商人心謂順修初**収聚後分析法**
云何農夫心謂随順初広**聞而後求法云何**
河心謂順修依因二**辺法云何陂池心謂**
随順渇無**厭足法云何井心謂如是思惟深**
復甚深云何守護心謂**唯此心実余心不実**
云何慳心謂随順為**己不与他法云何狸心**
謂順修徐進法云何**狗心謂得小分以為喜**
足云何迦楼羅心謂**随順朋党羽翼法云何**
鼠心謂思惟断諸**繫蹲云何歌詠心云何舞**

となり、最後の行の「蹲」は経典では「縛」とある。裏の経文は、

心謂修行如是法我当上昇種種神変云何
擊鼓心謂修順是法我当繫法皷云何室宅心
謂順修自護身法云何師子心謂修行一切
無怯弱法云何鵂鶹心謂常暗夜思念云何
烏心謂一切処驚怖思念云何羅刹心謂於
善中発起不善云何刺心謂一切処発起悪
作為性云何窟心謂順修為入窟法云何風



裏　(1)　表



裏　(2)　表

心謂遍一切処発起為性云何水心謂順修
洗濯一切不善法云何火心謂熾盛炎熱為

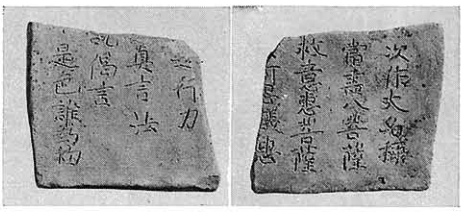
となり、二行目の「繫」は「擊」、「皷」は「鼓」と経典にある。表面の最後から七行目が十六字詰、裏面の最初から二行目が十八字詰になるが、ほかは一行十七字詰であることがわかる。

(2)は表裏面ともに縦横罫線がどちらかといえば点線状でひかれている。上下左右いずれも縁が残っていないので、あたりなどその製作工程については不明である。表は枠のなかに正確に経文が陰刻されるが、裏は枠を無視して経文が陰刻されているところがある。残る最大縦一一・五センチ、横一六センチ、厚一・三センチで、行間は一・八センチをかぞえる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

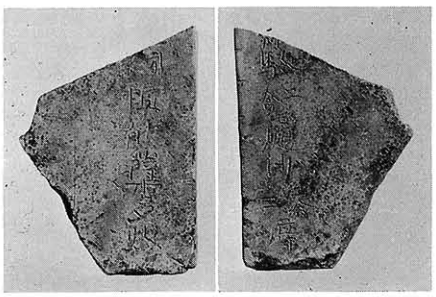
知復次秘密主以乾闥婆城譬解了成就悉
地宮復次秘密主以響喩解了真言声如縁
声有響彼真言者当如是解復次秘密主如
因月出故照於浄水而現月影像如是真言
水月喩彼持明者当如是説復次秘密主如
天降雨生泡彼真言悉地種種変化当知亦
爾復次秘密主如是空中無衆生無寿命彼
作者不可得以心迷乱故而生如是種種妄
見復次秘密主譬如火燼若人執持在手而

となり、初めより七行目に「是」が余分に陰刻される。裏の経文は、

法惟願世尊次説修真言行大悲胎蔵生大
漫荼羅王為満足彼諸未来世無量衆生為
救護安楽故爾時薄伽梵毗盧遮那於大衆



裏　(3)　表



裏　(4)　表

会中遍観察已告**執金剛秘密主言**諦聽金
剛手今説修行漫**荼羅行満足一切**智智法
門爾時毘盧遮那世尊**本昔誓願成就**無尽
法界度脱無余衆生界**故一切如来**同共集
会漸次証入大悲蔵発生**三摩**地世尊一切
支分皆悉出現如来之身**為**彼従初発心乃

となる。この裏の三行前が「入漫荼羅具縁真言品第二之一」の最初にあたるので改行のあったことが予想される。

(3)は表裏面とも縦にのみ縁にあたりが施され、点線状の罫線がこれは縦横ともに細線でひかれるが、経文はこれを無視して陰刻される。側面が指ナデによってかなり不整になっている。残る最大縦六・五センチ、横七センチ、厚一・四センチである。下欄、左右欄とも意識しては作られていない。行間は表一・七センチ、裏一・八センチをかぞえる。焼成は軟質で、灰白色を呈する。表の経文は、

二衆共囲遶侍衛無勝智行者於右方**次作大名称**
除一切蓋障執持如意宝捨於二分位**当画八菩薩**
所謂除疑怪施一切無畏除一切悪趣**救意恵菩薩**
非念具慧者慈起大衆生除一切熱悩**不可思議恵**

となり、一行二十字詰であることがわかる。三、四行目の「恵」は経典では「慧」である。裏の経文は、

一切現為汝証験　依住真言之**行力**
及余菩提大心衆　当得通達**真言法**
爾時執金剛秘密主復白世尊而説**偈言**
云何彩色義復当以何色云何而運布**是色誰為初**

となり、経典どおりに経文が陰刻されているが、経典どおりには改行されず、一行の経文の字詰はばらばらである。

(4)は小破片であるが、表面は横罫線をひくまえにあたりをつけ、針状のもので縦横ともに罫線がひかれる。下縁が欠損しているので、縦のあたりは確認できない。裏面は縦横ともに縁のあたりはなく、縦横の罫線がひかれるが縦罫線は縁にまで及ぶ。残る最大縦八・六センチ、横六・一センチで、厚平均一・五センチである。下欄は特に作られず、左右の欄外幅も表は特になく、裏が〇・九センチをかぞえる。行間は平均すると表裏とも一・六センチであるが、裏の最初の行のみ一・九センチである。焼成は軟質で、灰白色を呈する。表の経文は、

南麼三曼多勃馱喃一訥囉駄二合**嚧沙**二合二**摩**

となり、裏の経文は、

訶引路灑儜上三佉娜也薩鑁引平**怛他**引**蘖多**引**然**

である。表の「駄」は経典では「馱」とある。

(5)は表裏面とも、縦横ともあたりというよりは最初に錐状のもの

で深く縁をおさえそのまま縦横罫線がひかれる。この罫線は点線状である。経文は表は枠に正確に陰刻されるが、裏はこの枠を無視して陰刻されているところがある。上部、側面の縁は指ナデで整形されている。残る最大縦一三センチ、横一二・五センチ、厚一・三センチである。上欄外幅は表〇・八センチ、裏一センチをかぞえ、左右欄外幅は表〇・七センチ、裏一・一センチである。行間は表の最初の行が一・九センチで、あとは平均すると一・六センチである。裏は一・七センチである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。

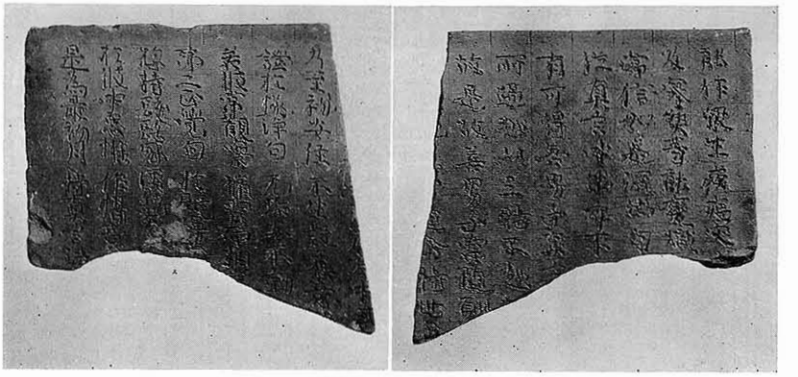


表　(5)　裏

表の経文は、

能作衆生疾疫災厲及世間呪術摂除衆毒
及寒熱等能変熾火而生清涼是故善男子
当信如是流出句真言威徳此真言威徳非
従真言中出亦不入衆生不於持誦者処而
有可得善男子真言加持力故法爾而生無
所過越以三時不越故甚深不思議縁生理
故是故善男子当随則通達不思議法性常
不断絶真言道**爾時世**尊復住三世無礙力

となるが、経典では、最初から八行目で改行されるが、ここでは改行なく続けられる。また七行目の「順」は「則」と陰刻される。一行は十七字詰である。裏の経文は、

於園苑僧坊若在巌窟**中或**意所楽処観彼菩提心
乃至初安住不生疑慮意随取彼一心以心置於心
証於極浄句無垢安不動不分別如鏡現世甚微細
若彼常観察修習而相応乃至本所尊自身像皆現
第二正覚句於鏡漫荼羅大蓮華王座深邃住三昧
惣持髪髻冠囲繞無量光離妄執分別本寂如虚空
於彼中思惟作摂意念誦一月修等引持満一洛叉
是為最初月持真言法則次於第二月奉塗香華等

となり、一行二十字詰であり、このことが罫線の枠を無視したことになる。六行目の「惣」は経典では「総」である。

(6)は巻第四の「密印品第九」の最初にあたるが、縦横ともに罫線がひかれ(下縁にはあたりがつきこのあたりに沿ってひかれる)、つくられた枠のなかに経文が正確に陰刻される。残る最大縦一二・二センチ、横一二センチ、厚一・四センチで、行間は表一・七センチ、裏一・八センチをかぞえる。下欄は意識的につくられていない。焼成はどちらかといえば軟質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

法界趣幖幟菩薩由是厳身故処生死**中巡**
歴諸趣於一切如来大会以此大菩**提幢而**
幖幟之諸天龍夜叉乾達婆阿蘇**囉掲**嚕荼
緊那囉摩睺羅伽人非人等敬**而去之受**敬
而行汝今諦聴極善思念吾**当演説如是説**

已金剛手白言世尊今正是時世尊今正是
時爾時薄伽梵即便住於身無害力三昧住
斯定故説一切如来入三昧耶遍一切無能
障礙力無等三昧力明妃日
南麽三曼多勃馱喃一阿三迷二咀履二合三

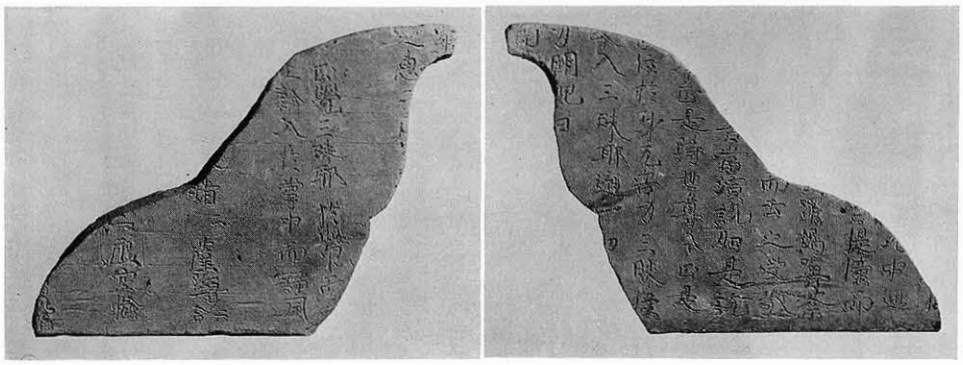


表　(6)　裏

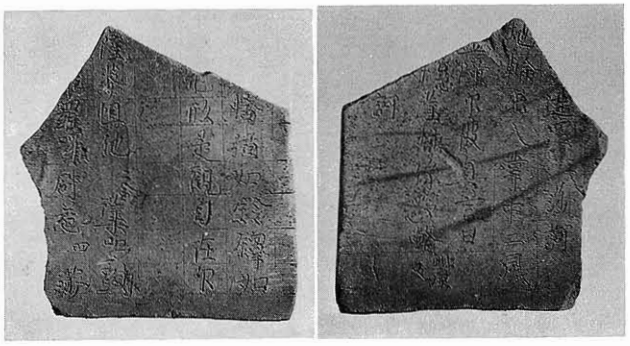


表　(7)　裏

となり、この経文のうち七行目については経典では改行となるが、ここでは続けている。四行目の「而去之受敬」は「而遶之受教」と経典ではなっている。裏の経文は、

慧手作空心合掌以定恵二虚空輪並合而
建立之頌日
此一切諸仏救世之大印正覚三昧耶於此印而住
又以定慧手為拳虚空輪入於掌中而舒風
輪是為浄法界印真言日
南麽三曼多勃陀喃一達摩馱睹二薩嚩二合
婆嚩句痕三
復以定慧手五輪皆等迭翻相鉤二虚空輪
首俱相向頌日
是名為勝願吉祥法輪印世依救世者悉皆転此輪

となり、最初の「恵」は「慧」である。この二行、九行目は経典では改行されるが、ここでは続けて陰刻されている。

(7)は表裏面とも縦横の縁にあたりは認められないが、罫線は縦横ともにひかれている。表裏が異なるのは表は縦横ともに縁にまで線が及ぶが、裏は横罫のみ縁まで及び、縦は下欄までで終る。残る最大縦一一センチ、横一〇・一センチ、厚一・二センチである。下欄外幅は表裏とも〇・八センチ、左右欄外幅は表裏とも〇・八センチをかぞえる。行間は平均すると表裏とも一・七センチである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

弩蘖多二微質怛嚂二合嚩囉達囉三莎訶
又如前印以二水輪二地輪屈入掌中二風
輪火輪相合是除一切蓋障印彼真言日

南麼三曼多勃馱喃一阿去急呼薩埵係哆弊毗度反
嗢蘖多二怛嚂二合三嚂嚂四莎訶

となるが、一行目の「訶」は経典では「訶四」となり、最後の行の「訶」は「訶五」となる。裏の経文は、

如前以定慧手相合散舒五輪猶如鈴鐸如
虛空地輪和合相持作蓮華形是観自在印
真言曰
南麼三曼多勃馱喃一薩婆怛他二合蘖哆嚩
路吉多二羯嚕儜麼也三囉囉囉斛惹四莎

となり、四行目の「二合」は経典では「引」とあり、五行目の「惹」は「若」である。

(8)は表面の上縁にはあたりはつけられず、縦横ともに点線状の罫線がひかれ、上から五字目は横罫線が二本ひかれ、経典を忠実に陰刻していることがわかる。この二本の線は裏も同様である。裏面は上縁にかなり深いあたりがつけられ、やはり点線状の縦横罫線がひかれている。焼成は堅質で、灰白色を呈するが、すこし瓦板がカーブしている。残る最大縦九・四センチ、横一二・五センチ、厚一・二センチである。上欄外幅は表〇・六センチ、裏〇・九センチをかぞえる。行間は表裏とも多少異なるが、平均すると一・八センチである。表の経文は、

復次南方印除一切蓋障大精進種子謂真陀摩尼
住於火輪中翼従端厳衆当知彼眷属秘密之標誌
次第応図画我今広宣説除疑以宝瓶置一股金剛
聖者施無畏作施無畏手除一切悪趣発起手為相
救意恵菩薩悲手常在心大慈生菩薩応以執華手
悲念在心上垂屈火輪手除一切熱悩作施諸願手
甘露水流注遍在諸指端具不思議慧持如意珠手
皆住蓮華上在漫荼羅中北方地蔵尊密印次当説

となり、五行目の「恵」は「慧」である。裏の経文は、経典とすこし改行が異なるが、

宝印手宝上五股金剛印堅意於宝上羯麼金剛印
一切皆応住彼漫荼羅中
西方虛空蔵円白悦意壇大白蓮華座置大慧刀印
如是堅利刃鋒鋭猶氷霜自種子為種智者当安布
及画諸眷属印形如法教虛空無垢尊応当以輪印
輪像自囲繞具足在風壇虛空慧商佉在風漫荼羅
清浄恵白蓮在風漫荼羅行慧之印相当以車渠瓶

となり、四行目の「堅」は経典では「堅」、七行目の「恵」はやはり「慧」である。

(9)は表裏面とも縦横罫線がひかれる。経文はこの枠のなかに正確に陰刻されているが、陰刻を終えたのちに不用意に指で瓦板表面をナデた痕があり、表面の最初の行の「生所以」と四行目の「悉地」はかすかに判読ができる。残る最大縦一一・五センチ、横七センチ、厚一・五センチで、行間は表裏とも平均すると一・八センチをかぞえる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

提心慳悋悩害衆生所以者何此性是染
非持菩薩戒何以故
過去諸正覚及与未来世現在仁中尊
具足智方便修行無上覚得無漏悉地

となり、天地左右が不明であるので、経典にあわせ復原したが、三、

四行目は罫線でできた枠を無視しているので、二行目、四行目が何字詰であったのか、この断片のみではわからない。裏の経文は、残片の一行手前が、「百字果相応品第二十」のはじまりであり、

密主若入大覚**世尊大**智灌頂地自見住於
三**三昧耶句秘密主入**薄伽梵大智灌頂即
以陀羅**尼形示現仏**事爾時大覚世尊随住
一切諸衆**生前**施作仏事演説三三昧耶句

となり、この復原から、断片は瓦板上部であることがわかる。

(10)は残る最大縦五・七センチ、横六センチ、厚平均一・四センチの小破片であるが、この小破片と奈良国立博物館の所蔵する大日寺瓦経の一片と経文を校合してつながることが確認された。表面は縦罫線のみで、裏面は点線状の縦横罫線がひかれ、この枠のなかに正確に経文は陰刻されている。焼成は堅質で、暗灰色を呈するが、その際の自然釉が表面にかかっている。行間は一・八センチである。表の経文は、

行人以**一花**供養没栗荼安置於座位復当用灌灑
応当**作満施持以**本真言次息災護摩或以増益法
如是世**護摩説名**為外事
復次内護摩**滅除**於業生了知自末那遠離色声等

となり、一行目の「花」は経典では「華」とあり、四行目を改行するのはさきの(8)と同様である。裏の経文は、

有想之**身則有**顕形衆色彼二種尊形成就
二種事**有相故**成就有相悉地無想故随生
無相**悉地而説**偈言
仏説有**相故楽欲**成有相以住無想故獲無相悉地

となる。このうち一行と四行目は経文が半分欠失しており不明なところもあるが、二行と四行目の「相」は経典では「想」になっている。

(11)の表面は縦横ともにあたりをつけ点線状の罫線がひかれる。経文が陰刻された後に瓦板の表面がすられ判読不能の経文もある。残る最大縦七・四センチ、横一七・八センチ、厚一・三センチである。裏面は縦の縁にあたりはなく横のみで、やはり点線状の罫線が縦横ともにひかれている。下欄外幅は表〇・七センチ、裏〇・八センチをかぞえる。左右欄外幅は表〇・三センチ、裏〇・五センチ、行間は表は平均一・七センチであるが、裏は最後の行と八行目が一・八センチ、二・三センチと広く残りは平均一・七センチである。焼成は堅質で、灰白色を呈する。表の経文は、

真言相応除障者　兼以**不動恵刀印**
稽首奉献閼伽水　行者**復献真言座**
次応供養花香等　去垢**亦以無動尊**
辟除作浄皆如是　加持**以本真言王**
或観諸仏勝生子　無量**無数衆**囲繞
右摂頌竟下当次第分別説
現前観囉字具点広厳飾謂浄光**焔鬘赫如朝日暉**
念声真実義能除一切障解脱三**毒垢諸法亦復然**
先自浄心地復浄道場地悉除衆**過患其相如虚空**

となり、この次の行は残る部分に経文はなく、(8)や(10)にみたように、十字分が書写されたのであろう。十七字詰の罫線枠をつくった関係でかなり経文はこの枠を無視して陰刻される。これは裏面も同様である。裏の経文は、

於彼中思惟導師諸仏子水中観白蓮妙色金剛茎
八葉具鬚蘂衆宝自荘厳常出無量光百千衆蓮繞
其上復観想大覚師子座宝王以校飾在大宮殿中
宝柱皆行列遍有諸幢蓋珠鬘等交絡垂懸妙宝衣
周布香花雲及与衆宝雲普雨雑花等繽紛以厳地
諧韻所愛声而奏諸音楽宮中想浄妙賢瓶与閼伽
宝樹王開敷照以摩尼灯三昧総持地自在之婇女
仏波羅蜜等菩提妙厳花方便作衆伎歌詠妙法音
以我功徳力如来加持力及以法界力普供養而住

となり、最後の行はここでは空白になっているが、

虚空蔵転明妃日

と続いていたものと考えられる。表の一行目の「恵」は「慧」である。

⑿は表裏面とも縦の線のあたりはつけられず、そのまま点線状の罫線（横も点線状の罫線）がひかれる。経文は正確にこの枠のなかに陰刻されている。残る最大縦一六・四センチ、横一九・六センチ、厚一・五センチである。上欄外幅は表〇・四センチ、裏〇・七センチをかぞえ、行間は表裏とも平均一・八センチである。焼成はどちらかといえば軟質で、灰白色を呈する。表の経文は、

及生悦沢厳身之相然後観法界心字遍浄
諸食以事業金剛加持自身是中種子如鑁
字真言所説復誦施十力明八遍方乃食之
説此明日
南麼薩婆勃菩提薩埵喃一唵麼蘭捺泥去
帝孺忙栗寧二莎訶

如是住先成就本尊瑜伽飯食訖已所余触
食以成弁諸事真言心供養所応食者当用
不空威怒増加聖不動真言当誦一遍受者
歓喜常随行人而護念之彼真言日
南麼三曼多伐折囉引二合赧一怛囉二合吒輭

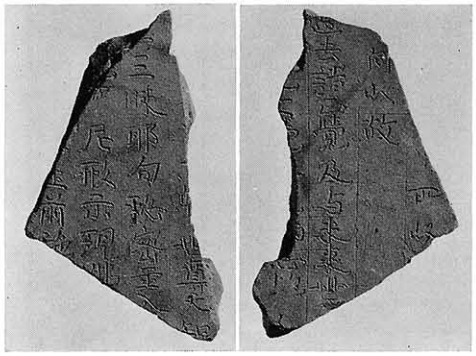
となり、五行目の勃と菩の間の「馱」が欠字となり、六行目の「訶」は経典では「訶三」とある。三行目の「真言所説」から経典では改行になっているが、ここでは続いて陰刻されている。裏の経文は、

伽二戦拏摩訶嚩灑停上三娑破二合吒野㘑四怛
囉二合麼野怛囉二合麼野五㘑怛囉二合吒輭悍漫六
彼食竟休息少時復当礼拝諸仏懺悔衆罪
為浄心故如是順修常業乃至依前読誦経
典恒依是住於後日分亦復如是初夜後夜
思惟大乗無得間絶至中夜分以事業金剛
如前被金剛甲敬礼一切諸仏大菩薩等次
当運心如法供養而作是念我為一切衆生
志求大事因縁故応当愛護是身少時安寝
非為貪著睡眠之楽先当正身威儀重累二

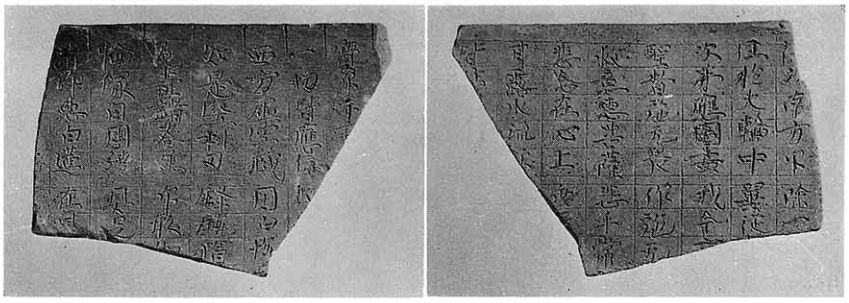
と、経文の残りと経典を校合するとこのように復原される。四行目の「順」は「循」となっている。

⒀は巻七の最後の部分であることがわかるが、表面はあたりをつけそのまま点線状の罫線がひかれる（横も点線状の罫線）。表の経文は、

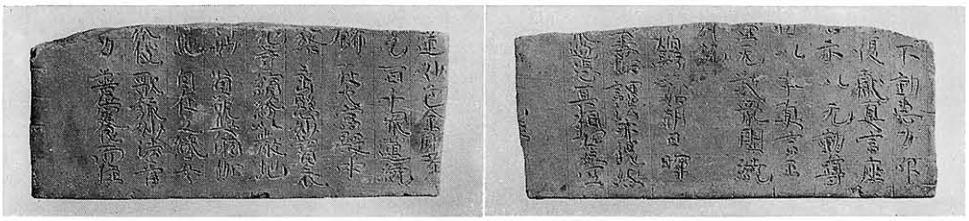
随所信解修観照如前心供養之儀
及依悉地流出品出世間品瑜伽法



裏　(9)　表

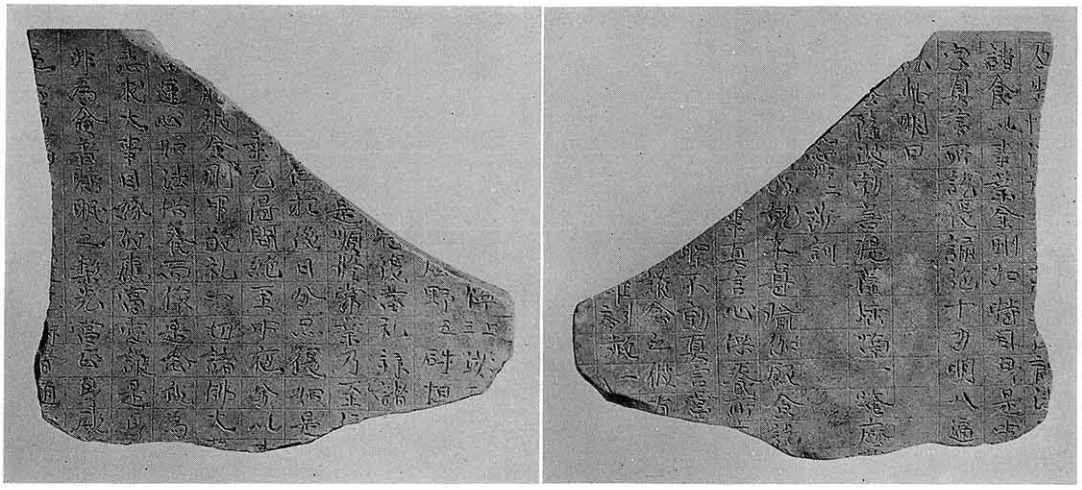


裏　(8)　表

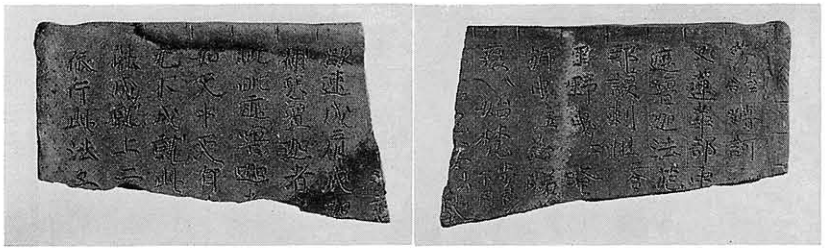


裏　(11)　表

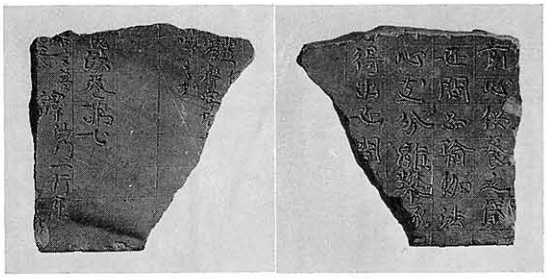
裏　(10)　表



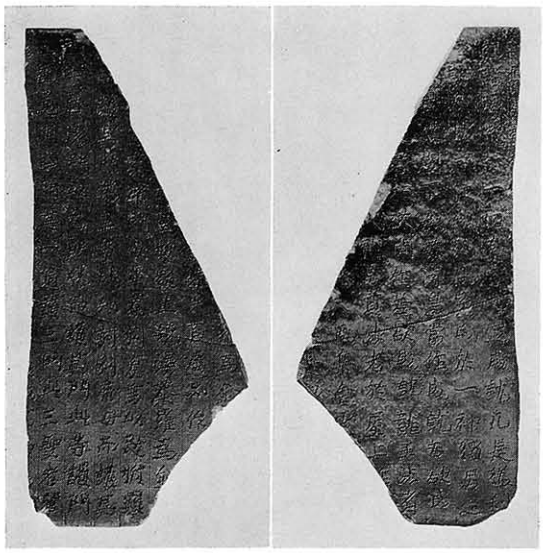
裏　(12)　表



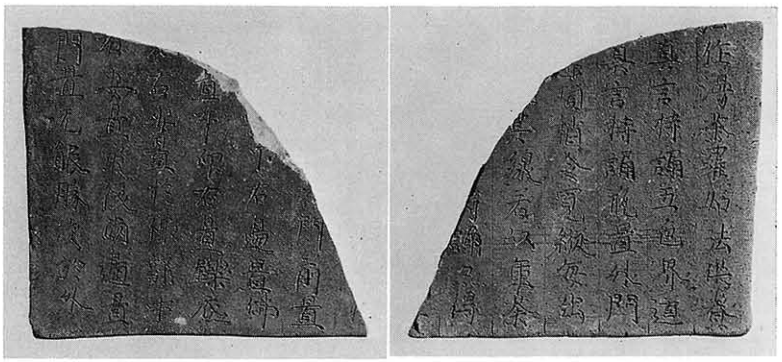
裏　(14)　表



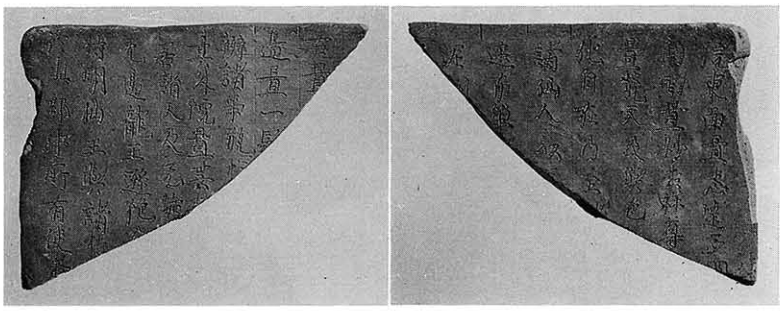
裏　(13)　表



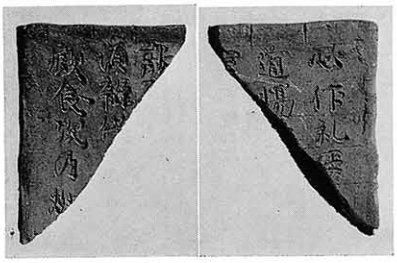
裏　(15)　表



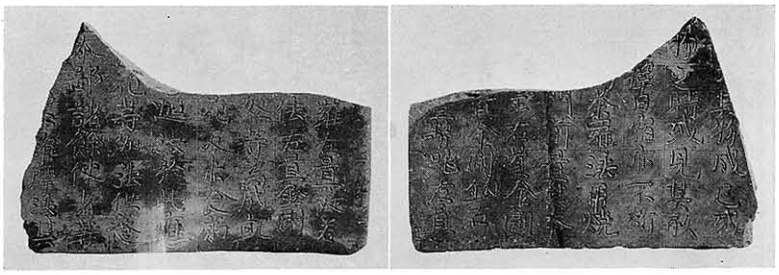
裏　(16)　表



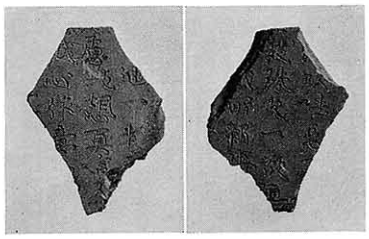
裏　(17)　表



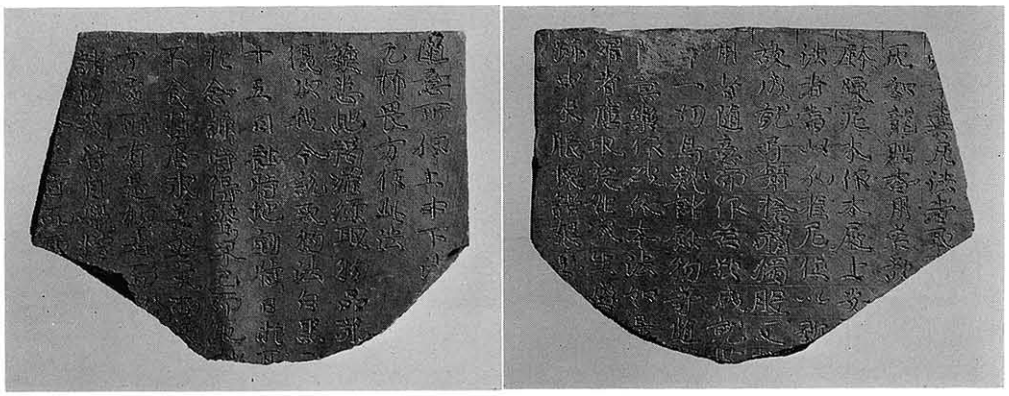
裏　(19)　表



裏　(18)　表



裏　(20)　表



裏　(21)　表

彼於真実縁生句内心支分離攀縁
依此方便而証修常得出世間成就

となり、この次の行がここで空白になっているのは、経典では「如所説優陀那偈言」と続きその下方が空白のままのためである。残る最大縦八・四センチ、横八・六センチ、厚平均一・四センチである。下欄外幅は〇・六センチで、行間は平均一・八センチをかぞえる。裏の下欄外幅は二・二センチであり、行間は平均すると一・七センチである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。残る文字は、

囉[他]声字
呼之如
（空　白）
[𢖍]法巻第七
□□□善訳沙門一行印
□□畏

の五行分である。巻第七の最初の部分を経典でみると、

大毘盧遮那成仏神変加持経巻第七
大唐天竺三蔵善無畏
共沙門一行　訳
供養次第法中真言行学処品第一

ではじまるが、この残る文字から判断して、ここには「供養（次第）法巻第七」とあったと思われる。さらにこの巻第七の最後を経典でみると、

嚩毘庚反弊毘也底丁以反哩爾入声囉他以反。凡真言中平声字皆稍上声呼之。若諸与下字相連。亦可逐便以入声呼之。如婆伽梵呼為薄伽梵之類是也

大毘盧遮那成仏神変加持経巻第七

とあり、俸線のところが確認されるのである。その意味ではかなり簡略化していることがわかる。

(三)

大日寺瓦経では蘇悉地経は別本二が書写陰刻されているのが特徴であるが、八片のうち巻上が一片、巻中が四片、巻下が三片ということが経典との校合で判明した。

(14)は表裏面に縦横ともに深い彫りのあたり（裏面横のあたりはなし）がつけられ、点線状の罫線がひかれるが、かなり不整である。残る最大縦七・七センチ、横一二・八センチ、厚一・三センチで、上欄外幅は表〇・六センチ、裏〇・八センチ、左右欄外幅は表〇・八センチ、裏一センチをかぞえ、行間は表裏ともかなり異なるが、平均すると一・七センチをかぞえる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。その際の自然釉が表面に認められる。さらに小口側面に「蘇悉地」とあるが、これは「蘇悉地上之何番」という順序を示す陰刻があったと思われる。表の経文は、

莎去二合二嚩訶四
又蓮華部中大忿怒施婆嚩訶真言為阿毘
遮嚕迦法施婆嚩訶真言曰
那謨刺怛二合娜怛二合嚕耶野一那謨摩訶室
里野曳二唵同上三鑠枳二合曳縒摩曳四謨蘇告反
弭曳五悉睇六娑去馱野七如廃無計反下同始
廃八始梵歩甘反下同迦嚩始梵米九阿上嚩歌十摩

嚩遏詫娑去馱顎ナ莎去ニ合嚩訶ナニ

となり、裏の経文は、

欲速成扇底迦者当用仏部真言若欲速成
補瑟置迦者当用蓮華部真言若欲速成阿
毗毗遮嚕迦者当用金剛部真言此経深妙
如天中天有言上中之上若依此法一切諸事
無不成就此経雖属金剛下部為奉仏教亦
能成就上二部法譬如国王随有教勅自亦
依行此法亦爾准義応知若有真言字数雖

となり、二行目の「置」は経典では「徵」であり、三行目の最初の二文字の「毗毗」は一字重複した誤写であり、そのため次の行が十八字詰になる。

(15)は高度の焼成のため、瓦板がカーブしているが、幸い二片が接合されて天地の寸法がわかる。表裏面とも錐状のもので上下縁にあたりをつけ、このあたりにそって点線状の罫線がひかれる。残る最大縦一九・九センチ、横八・五センチ、厚一センチである。表裏とも上下欄はつくられていない。行間は表裏とも一・二センチである。焼成の時の吹き出しが、表面の上部半分に認められる。色調は黒灰色を呈する。表の経文は、

余諸類是故一切真言決定成就凡是猛利
成就於塚間作或於空室或於一神独居之
廟或迥独樹下或於河辺当作成就若欲成
就女薬叉者於林間作若欲成就龍王法者
於泉辺作若欲成就富貴法者於屋上作若
欲成就使者法時於諸人民集会処作若欲

成就入諸穴法於窟中作此是秘密分別成

となり、裏の経文は、

折羅頭皆相接囲繞漫荼羅為金剛牆復以
金剛鉤欄真言持誦鉄末百遍亦作三服抜
折羅各横置於竪抜羅上繞漫荼羅為金剛
鉤攔外漫荼羅門以軍荼利真言以跋折羅
印而護其門第三重門以訶利帝母而護其
門中台院門以無能勝而護其門此等護門
三部通用或用其一通護三門此三聖者皆

となるが、三行目の「竪抜羅」は経典では「竪抜折羅」とあり、折が欠字になる。さらに四行目の「跋」は経典では「抜」、五行目の「三」は「二」でありこれは誤写と思われる。しかし表裏とも一行十七字詰である。

(16)と(17)は連続される瓦経で、(17)の小口側面に「悉地中之十一」とあるので、これは「蘇悉地中之十一」枚目という意味であり、この(16)は巻中の十枚目ということがわかる。(16)の瓦板は胎土にかなり砂粒を含んでいるが、表面は縦横ともあたりをつけ即それにそって縦横とも罫線がひかれている。裏も同様である。残る最大縦一〇・五センチ、横一一・四センチ、厚一・一センチである。下欄、左右欄は意識的には作られておらず、行間は表裏とも平均一・七センチである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

誦置於側近次則依法作漫荼羅如法供養
而作成就用能弁諸事真言持誦五色界道
線纏四橛上以軍荼利真言持誦瓶置外門
前所纏之線両頭俱繋瓶項稍令寛縦毎出

入時思念軍荼利挙線而入**其線若以軍荼**
利真言持誦亦得或取本法真言持**誦亦得**

となるが、四行目の「項」は「頸」、「寛」は「寛」とある。裏の経文は、

当中置抜折羅於諸角上置瓶於外**門前置**
能弁諸事瓶於内東面置法輪印**右辺置仏**
眼印左辺置仏毫相印右**置牙印左置鑠底**
印右置五種仏頂次第左**右安置於仏部中**
所有諸尊随意次第左右**安置最後両辺置**
阿難及須菩提次下近**門置無能勝次於外**

となり、一行十七字詰で、表裏とも十五行であることが判明する。この字詰は次の(17)では少し異なるが、同一筆者であることはわかる。

(17)は表裏とも上部縁にあたりをつけ点線状の縦横罫線がひかれる。左右の縁にもあたりがあったが、これは罫線をひいてのち整形されている。できた枠を無視して経文が陰刻されている。残る最大縦一〇センチ、横一三・二センチ、厚一・四センチである。上欄、左右欄外をつくらないのも(16)と同様である。行間は平均すると一・六センチをかぞえる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

院東面置悉達多明王北面置大勢至尊
南面置妙吉祥尊西面置軍勢囉尊東面右
置梵天及与色界諸天左置因陀羅上至他
化自在乃至地居天神於東南方置火神与
諸仙人以為眷属於南方置焔摩王与毘舎
遮布単那諸魔怛羅而為眷属於西南方置
泥利帝神与諸羅刹而為眷属於西面門置

となり、最初の行のみ十六字詰で、ほかは十七字詰であることがわかる。裏の経文は、

右置半拏羅囃悉顰左置耶輪末底近門両
辺置一髻明妃及馬頭明王於外門前置能
弁諸事瓶於門及角置抜折羅中置蓮華於
其外院置其梵天及因陀羅摩醯首羅等浄
居諸天及無垢行菩薩光鬘菩薩荘厳菩薩
無辺龍王遜陀及優波遜陀龍王及商佉
持明仙王与諸持明仙倶如前諸方護世
於此部中所有使者諸類真言及明随意安

となり、最後から二、三行目が十六字詰、ほかは十七字詰であり、表裏とも十五行であることがわかる。

(18)は「蘇悉地羯羅経被偸成物却徴法品第十六」の部分にあたり、この表面の最初の行の一行前に表題がつけられていた。表裏面とも縦横あたりをつけ即罫線がひかれいずれもそれが縁にまで及んでいる。この四角の枠を無視して経文が陰刻されているところもある。残る最大縦九・三センチ、横一三・八センチ、厚一・四センチで、下欄外幅は表〇・五センチで裏は特にない。左右欄外幅は表〇・五センチ、裏〇・九センチ(これも特に作ったというものではない)をかぞえ、行間は表裏とも平均すると一・七センチである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

我今当説被偸之物却徴之法**其物成已或**
作成就之時其物被偸**偸物之時或見其形**
或但失物不見偸者于時不**択日宿亦不断**

食発起瞋怒現前速応作此漫荼羅法用焼
屍灰三角而作唯開西門於外門前置其本
尊内院東角置蘇悉地羯羅明王右置金剛
忿怒左置大怒右置金剛拳左置金剛鉤右
置金剛計利吉羅左置毘摩右置勢吒左置

となり、一行十七字詰で陰刻されていたことがわかる。裏の経文は、

賓蘗羅右置阿設寧左置商羯羅左置微若
耶右門置迦引利左門置難陀目佉左置金剛
軍右置蘇摩呼及置諸余大忿怒等為成就
故次第安置如法啓請以赤色花及赤食等
次第供養如前所説阿毘遮嚕迦法於此応
作門外所置本尊応以美妙花等如法供養
於其外院置八方神及置本部諸余使者等
尊亦須如是供養於其中央作護摩法其

となり、一行目の「左」は経典では「右」であり、二行目の「左」と同じくせであり誤写と考えられる。同じ行の「若」も経典では「惹」である。二行目の「引」を一字分と考えたので罫線を無視して十八字詰になっており、八行目は十六字詰である。

⑲は巻中の一部で、表裏面とも上縁に深くあたりがつけられる。表はこのあたりにそって罫線がひかれ、横罫線もひかれるがあたりは認められない。裏は縁のところにあたりがひかれるのみで、縦横とも罫線はない。瓦板表面、側面とも指ナデの痕が顕著に残る。小口側面に「蘇悉」と陰刻があるが、これはさきの⑰と同様、「蘇悉地下之何番」という枚数の陰刻であろう。残る最大縦七センチ、横五・二センチ、厚一・二センチで、上欄外幅は表〇・七センチ、裏〇・五センチで、左右欄外幅は表裏とも〇・八センチをかぞえる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

心作礼再三啓白大慈悲者請依本願来降
道場若不誠心徒多念誦乃至真言亦皆慇
重以用両手捧閼伽器頂戴供養為上悉地

となり、裏の経文は、

能啓請本尊如是三時皆応依此如前已説応
須弁供先献塗香次施花等復献焼香次献
飲食次乃燃灯如其次第用忿怒王真言此

となり、裏の最後より三行目が十八字詰で、あとは十七字詰ということがわかる。

⑳は縦七・四センチ、横五・八センチ、厚一・四センチの小片であるので経文を復原するのに無理があるかも知れないが、ともかく表の経文は、十七字詰と考えて復原すると、

若有聾欬昏沈吹呿忘真言字即起就水作
灑浄法縦掐数珠欠一欲匝有斯病至灑浄
訖已還従首念被所鄣隔為須一一皆従始

となり、三行目の「鄣」は経典では「障」である。裏の経文は、

随念誦処数珠一匝一覩尊顔而作一礼念
誦了已安心浄慮或想真言及其尊主三時
念誦但初中後誠心作意遍数多少皆例一

となる。表裏とも点線状の罫線となっているが、行間は表裏とも一・七センチである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。

㉑は焼成の関係で瓦板がすこしカーブしている。表裏とも上の縁に深いあたりをつけそのまま罫線をひいているが、横はあまり深く

ないあたりをつけそのまま点線状の罫線がひかれる。残る最大縦一三・四センチ、横一八・四センチ、厚一・三センチで、上欄外幅は表裏とも〇・五センチ、左右欄外幅は表〇・七センチで、裏は特にない。行間は平均すると表裏とも一・六センチである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

就牛糞灰法者取蘭若所乾浄牛糞焼作白
灰和龍脳香用若欲成就木屐法者取室唎
鉢嘮尼木作木屐上安其蓋若欲成就傘蓋
法者当以孔雀尼作以新端竹而作其莖若
欲成就弓箭槍矟独股刃棓及諸器仗随世
用者随意而作若欲成就世間鞍馬車乗牛
羊一切鳥獸諸余物等随世人輩共将為上
随意楽作或依本法如是制作若欲成就吠多
羅者応取族姓家生盛年無病卒死体無瘢
跡由未脹壊諸根具足取如是屍而作成就

となり、四行目の「尼」は「尾」である。八行目のみ十八字詰である。裏の経文は、

随意所作上中下法所取之物亦復如是心
無怖畏方作此法
蘓悉地羯羅経取物品第三十
復次我今説取物法白黒二月八日十四日
十五日日蝕時地動時日於其午前而取其物
於念誦時得驚界已而取諸物或澡浴清浄
不食持斎求善警界而取諸物所説須物随
方処所有是物者而就貴貨不讎価直而取
諸物或時自覚増加威力堪忍飢寒種種異
相当爾之時而取諸物其所取諸物各依本

となり、三行目の「蘓」は「蘇」であり、これら小片にみえる「蘇」はいずれも「蘓」になっている。六行目の「驚」は「警」である。

(四)

つぎに妙法蓮華経の瓦経片をみてみると、(22)は妙法蓮華経方便品第二の一部で、表裏面のうち表面の横罫線をひくのにあたりが認められるのみで、まず縦罫線をひき、そののち横罫線がひかれる。裏面にはあたりをつけ墨によって罫線がひかれる。そのなかに経文が正確に陰刻されている。小口側面に「一之九」という刻銘があるが、これは上の一以上が欠損しているのではっきりしないが、これは九枚目を意味している陰刻である。行数からしてこの表記は正しい。残る最大縦一〇センチ、横一〇・三センチ、厚〇・九センチである。上欄外幅は表で〇・二センチ、裏で〇・三センチをかぞえる。行間は平均すると、表は一・六センチ、裏は一・五センチである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

千万億無数諸仏尽行諸仏無量道法勇猛
精進名称普聞成就甚深未曾有法随宜所
説意趣難解舎利弗吾従成仏已来種種因
縁種種譬喩広演言教無数方便引導衆生
令離諸著所以者何如来方便知見波羅蜜
皆已具足舎利弗如来知見広大深遠無量
無礙力無所畏禅定解脱三昧深入無際成

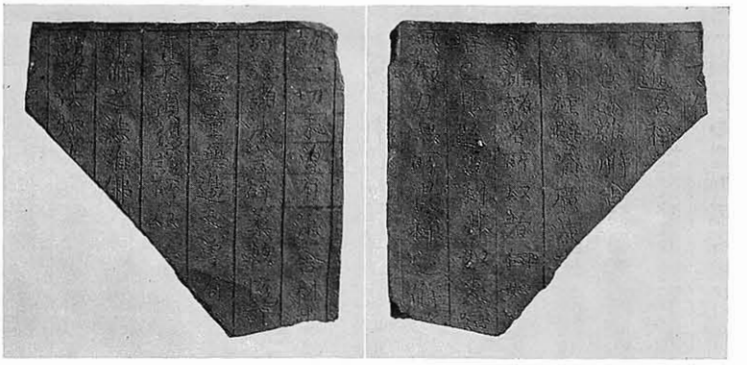


表　(22)　裏

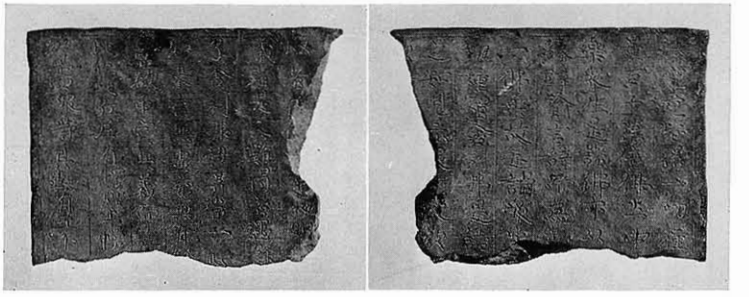


表　(23)　裏

となり、三行、六行目の「舍」は「舍」である。裏の経文は、

就一切未曽有法舍利弗如来能種種分別
巧説諸法言辞柔軟悦可衆心舍利弗取要
言之無量無辺未曽有法仏悉成就止舍利
弗不須復説所以者何仏所成就第一希有
難解之法唯仏与仏乃能究尽諸法実相所
謂諸法如是相如是性如是体如是力如是

となり、一行目の「舍」は「舍」である。一行十七字詰で、復原すると表裏十五行であったことがわかる。

(23)と(24)は同じ瓦板で、やはり方便品の一部である。(23)は縦罫線よりも横罫線の方が彫りは浅く、横罫線がさきにひかれ、縦罫線と交差する。指圧痕が認められるが、横罫線は墨線とともにかなり細線でひかれる。経文はこのつくられた枠内に正確に陰刻されている。裏の欄枠の罫線にみだれが認められる。残る最大縦八・七センチ、横一二センチ、厚一センチである。上欄外幅は表裏とも〇・三センチで、左右欄外幅は表が〇・四センチ、裏が〇・三センチをかぞえる。行間は平均すると一・五センチである。(24)も(23)と同様で、残る最大縦五センチ、横六・五センチで、厚一センチである。上欄、左右欄外の幅も(23)と勿論同様である。しかし行間をみると、一・七、一・六、一・五センチとばらばらで、さきの平均一・五センチとは異なっている。いずれも焼成は堅質で、暗灰色を呈する。(23)の表の経文は、

法究竟皆得一切種智舍利弗現在十方無
量百千万億仏土中諸仏世尊多所饒益安
楽衆生是諸仏亦以無量無数方便種種因
縁譬喩言辞而為衆生演説諸法是法皆為
一仏乗故是諸衆生従仏聞法究竟皆得一
切種智舍利弗是諸仏但教化菩薩欲以仏
之知見示衆生故欲以仏之知見悟衆生故

となり、裏の経文は、

以者何仏滅度後如是等経受持読誦解
義者是人難得若遇余仏於此法中便得決
了舍利弗汝等当一心信解受持仏語諸仏
如来言無虚妄無有余乗唯一仏乗爾時世
尊欲重宣此義而説偈言

比丘比丘尼有懐増上慢優婆塞我慢優婆夷不信
如是四衆等其数有五千不自見其過於戒有欠漏

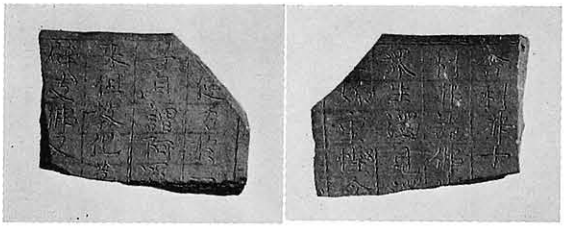
となり、(24)の表の経文は、

舎利弗十方世界中尚無二乗何況有三舎
利弗諸仏出於五濁悪世所謂劫濁煩悩濁
衆生濁見濁命濁如是舎利弗劫濁乱時衆
生**垢重慳**貧嫉妬成就諸不善根故諸仏以

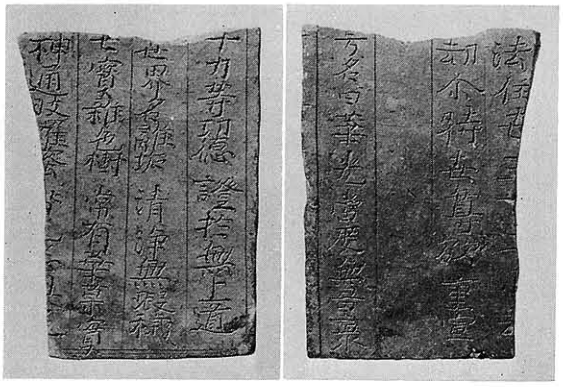
となり、裏の経文は、

方**便力於一**仏乗分別説三舎利弗若我弟
子自謂阿羅漢辟支仏者不聞不知諸仏如
来但教化菩薩事此非仏弟子非阿羅漢非
辟支仏又舎利弗是諸比丘比丘尼自謂已

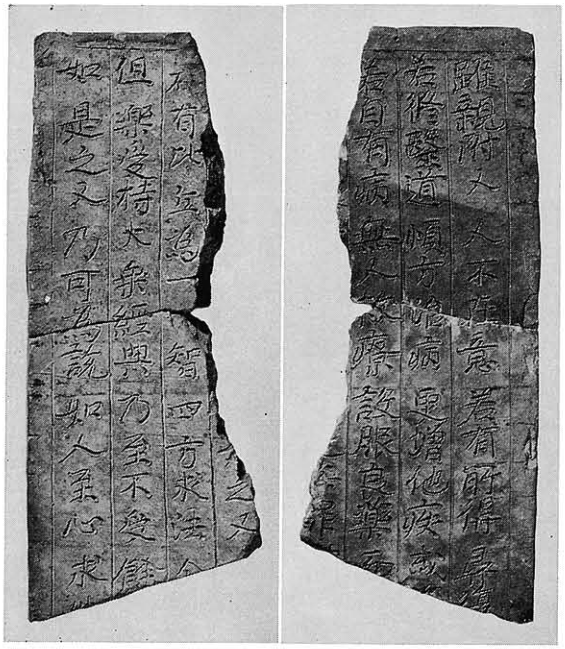
となり、一行十七字詰で、さきの(23)とあわせて表裏とも十五行であ



裏　(24)　表



裏　(25)　表



裏　(26)　表

ることがわかる。いずれも「舎」は「舎」である。

(25)は譬喩品第三の一部で、表裏面とも縦罫線はない。表裏面で異なるのは、天地のうち地の罫線が表面はひかれず、裏面は二本線がひかれていて、焼成の関係で瓦板がすこしカーブする。小口側面の下方には「交了」と陰刻されている。残る最大縦九・七センチ、横六・九センチで、厚は平均すると〇・九センチをかぞえる。左右欄外幅は表〇・四センチ、裏〇・三センチで、行間は一行ごとにその幅を異にしているが、表裏とも平均すると一・六センチということになる。経文は正確に陰刻されるが、字体はすこし右さがりの癖が認められる。焼成は堅質で、灰白色を呈する。表の経文は、

是華光仏滅度之後正**法住世**三十二小劫
像法住世亦三十二小**劫爾時世尊欲重宣**
此義而説偈言

舍利弗来世成仏普智尊号名日華光当度無量衆

となり、最後の行のみ二十字詰となるが経典どおりに陰刻されていることがわかる。裏の経文は、

供養無数仏具足菩薩行十力等功徳証於無上道

過無量劫已劫名大宝厳世界名離垢清浄無瑕穢

以琉璃為地金縄界其道七宝雑色樹常有華果実

彼国諸菩薩志念常堅固神通波羅蜜皆已悉具足

で、いずれの行も二十字詰となる。やはり表裏とも十五行である。

㉖も譬喩品第三の一部であるが、表裏面とも縦罫線をひくに際して上欄に錐状のものであたりの穴を穿ち、その穴にそって罫線がひかれる。現在下辺部が欠失しているのではっきりしないが、下欄にもこのような錐状の穴を穿っていたものと思われる。横罫線は錐状というよりは篦状のものであたりをつけ、そのあたりにそって墨線がひかれている。しかしこのあたりは規則正しくつけられているとは言い難い。経文は縦罫線と横墨線でつくられた枠のなかにだいたい正確に陰刻されている。小口側面に「妙法」の陰刻がある。残る最大縦一八・九センチ、横七・二センチ、厚一・四センチである。行間は表の最初と裏の最後がともに一・八センチで、その他は表が一・六センチ、裏が一・五センチとなっている。上欄外幅は表〇・七センチ、裏〇・六センチをかぞえ、左右欄外幅は表一センチ、裏〇・六センチである。表右欄外に墨書で、「二第十三枚」とあるが、これはさきの小口の「妙法」とあわせてみると、妙法蓮華経巻第二の一三枚目の意を表わしているものとして注目されるし、この表記は枚数も合い正しい。焼成はどちらかといえば軟質で、灰白色を呈する。表の経文は、

雖親附人人不在意若有所得尋復忘失

若修医道順方治病更増他疾或復致死

若自有病無人救療設服良薬而復増劇

若他反逆抄劫竊盗如是等罪横羅其殃

となり、裏の経文は、

譬喩言辞説法無礙如是之人乃可為説

若有比丘為一切智四方求法合掌頂受

但楽受持大乗経典乃至不受余経一偈

如是之人乃可為説如人至心求仏舎利

となり、表裏とも十五行で、一行十六字詰であることがわかる。

㉗は見宝塔品第十一の一部であるが、表裏とも罫線は認められるが、まず墨でつぎに篦状のものであたりをつけ、これにそって針状のもので罫線がひかれる。しかし縦横ともにどちらかといえば墨線の方がよく残り、特に表面の方は墨線が主体となっている。上部、側面とも指ナデによって不整なところが認められるし、瓦板そのもののゆがみがひどい。残る最大縦九センチ、横六センチ、厚は平均すると一センチである。行間は表裏とも一・二センチである。上欄外幅は表ははっきりしないが、裏は〇・五センチをかぞえる。左右欄外幅は表〇・六センチ、裏〇・四センチである。この瓦板では縦一センチ、横一・一センチの四角枠がつくられるが、そのなかに経文が正確に陰刻されている。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

枝葉華菓次第荘厳樹下皆有宝師子座高

五由旬亦以大宝而校飾之亦無大海江河

及目真隣陀山摩訶目真隣佗山鉄囲山大

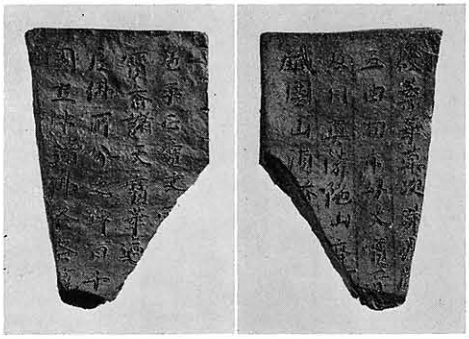


表　(27)　裏

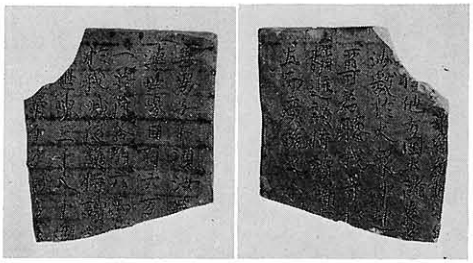


表　(28)　裏

鉄囲山須弥山等諸山王通為一仏国土宝

となり、裏の経文は、

地平正宝交露幔遍覆其上懸諸幡蓋焼大

宝香諸天宝華遍布其地爾時東方釈迦牟

尼仏所分之身百千万億那由他恒河沙等

国土中諸仏各各説法来集於此如是次第

となり、一行十七字詰で表裏とも十五行であることがわかる。

(28)は従地涌出品第十五の一部で、表面は縦罫線はあたりをつけ点線状の罫線をひくが、横はあたり罫線ともにないようで、かすかであるが墨線が認められる。しかし経文はこれを無視して陰刻されている。裏面は縦罫線は表面と同様であるが、横はあたりをつけ墨線と点線状の罫線があらわされ、この枠のなかに経文が陰刻されている。小口側面に「交了」の陰刻がある。上縁部が篦状のものでカットされている。残る最大縦八・八センチ、横七・五センチで、厚は平均すると〇・九センチである。行間は平均一・二センチで、上欄外幅は表裏とも〇・五センチ、左右欄外幅は表裏とも〇・六センチをかぞえる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

妙法蓮華経従地涌出品第十五

爾時他方国土諸来菩薩摩訶薩過八恒河

沙数於大衆中起立合掌作礼而白仏言世

尊若聴我等於仏滅後在此娑婆世界懃加

精進護持読誦書写供養是経典者当於此

土而広説之爾時仏告諸菩薩摩訶薩衆止

となり、裏の経文は、

善男子不須汝等護持此経所以者何我娑

婆世界自有六万恒河沙等菩薩摩訶薩一

一菩薩各有六万恒河沙眷属是諸人等能

於我滅後護持読誦広説此経仏説是時娑

婆世界三千大千国土地皆震裂而於其中

有無量千万億菩薩摩訶薩同時涌出是諸

となり、やはり一行十七字詰で、表裏とも十五行である。

(五)

石田氏の復原的研究によれば金剛頂経は四十枚になるが、経文校合の結果、三十八片のなかに四片あることが確認された。

(29)は下縁にあたりをつけるが罫線はなく、このあたりにそって経文が陰刻されて

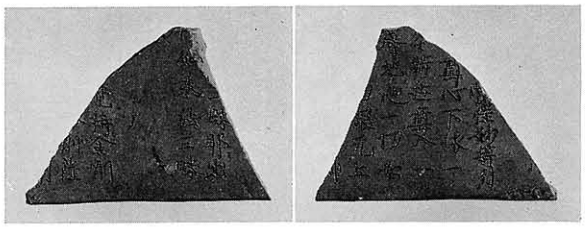


表　(29)　裏

いる。残る最大縦七センチ、横九・六センチ、厚一センチで、すこし瓦板がカーブしている。経文はやはり一行十七字詰で陰刻されている。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

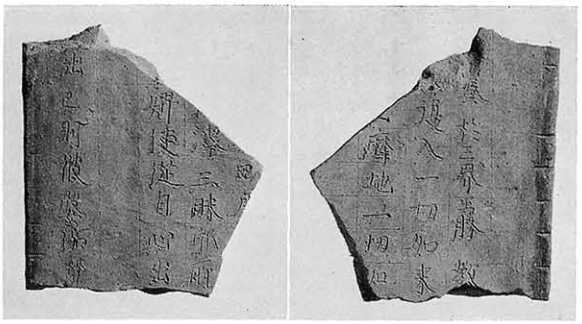
諸勝大奇特　安立仏利益　常住妙等引
時彼常喜悦根大菩薩身従世尊心下依一
切如来後月輪而住復請教令時世尊入一
切如来奇特加持名金剛三摩地受一切如
来出現三昧耶尽無余有情界一切根無上
安楽悦意故乃至得一切如来根清浄智神

となり、裏の経文は、

爾時婆伽梵復入観自在大菩薩三昧耶出
生法加持名金剛三摩地一切如来法三昧
耶名一切如来心従自心出
嚩日囉二合達摩
従一切如来心纔出已即彼婆伽梵持金剛
自性清浄一切法平等智善通達故金剛薩
埵三摩地為正法光明出已以彼正法光明

と残る経文から復原できるが、かなり忠実に経典どおりに陰刻されていることがわかる。

(30)は表面の横に箆状のものであたりをつけ、横罫線をひいてのち縦罫線をひくが表裏とも点線状になっている。裏面も同様である。行間は表の最初と裏の最後の行が一・八センチをかぞえるが、その他は平均一・六センチである。残る最大縦九・五センチ、横八・九センチ、厚一・四センチである。左右欄外幅は表〇・六センチ、裏〇・九センチである。小口側面に「頂中之七　校了」とあるが、これは上部が欠失しているが、金剛頂経の巻中の七枚目を意味しているのである。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、



裏　(30)　表

裏　(31)　表

称為宝供養　於三界王勝　教勅受供養
爾時世尊毘盧遮那復入一切如来歌詠供
養三昧耶所生名金剛三摩地一切如来族

となり、裏の経文は、

爾時世尊不動如来奉答毘盧遮那如来供
養故入一切如来能悦沢三昧耶所生名金
剛三摩地一切如来婢使従自心出
嚩日囉二合杜閉
従一切如来心纔出已則彼婆伽梵持金剛

となり、原則としては一行十七字詰であるが、経典を忠実に陰刻している。

(31)は表裏面とも縦横ともにあたりをつけるが、罫線はない。この横のあたりと縦のあたりにそって経文が陰刻される。残る最大縦六・四センチ、横一一・五センチ、厚一センチである。意識した左右欄はないが、下欄もすこし幅をもたせている程度である。表の経文は、

金剛入生已水成金剛形由観速成就於水上遊行
復生金剛入身色如自形修習於如是自然如仏形
遍入於自身自身観如空随楽修習已則得安達怛
金剛入自己観自如金剛乃至踊上昇則得虚空行
如是等真言曰
嚩日囉喏攞嚩日囉嚕波嚩日囉迦奢嚩日
羅麼鉻次則教金剛持明悉地成弁印智

となり、裏の経文についても、

応観月形像上踊於虚空手攀於金剛得金剛持明
昇於月輪上応観金剛宝浄身者随欲刹那成騰空
昇於月輪已手持金剛蓮応観金剛眼則得持明位
住於月輪中応観業金剛速獲金剛巧則得諸持明
如是等心真言曰
嚩日羅達攞囉怛娜達攞播娜磨達攞羯麼
達攞
次則教一切如来最勝悉地成弁印智
住諸金剛定思於虚空界随楽金剛身刹那成騰空

と瓦板の空白などからこのように復原することができる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。

(32)は表裏面とも横のあたりはかなり深くつけられるが、縦は認められない。表裏ともこのあたりから点線状の罫線がひかれるが、縦罫線の方が最初である。残る最大縦五・八センチ、横七・六センチ、厚一・六センチである。行間は表裏とも一・五～一・七センチと異なり、特に裏の三行目はかなりみだれている。下欄外幅は表裏とも一センチ、左右欄外幅は表裏とも〇・七センチである。縁や瓦板表面もかなり指ナデなどにより不整になっている。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、

能遍入仏智由結阿閦毘獲得無傾動由結宝生印
能摂受於他由結法輪印則能転法輪由無畏勝速
施有情無畏堅作金剛鬘金剛薩埵楽由金剛鉤召
刹那集諸仏金剛箭令染尚能金剛妻金剛喜諸仏

となり、裏の経文は、

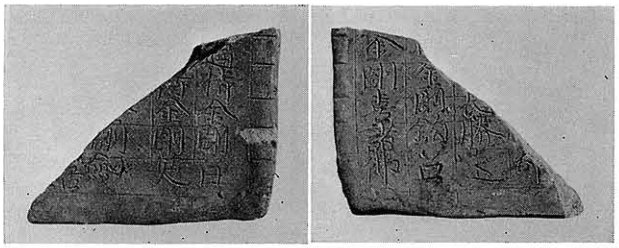


表　(32)　裏

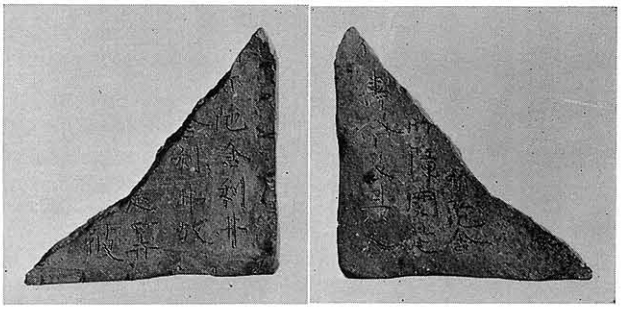


表　(33)　裏

咸施善哉声結大金剛宝従師受灌頂遍持金剛日
得如金剛日竪金剛幢幡則得雨宝雨遍持金剛笑
速仏平等笑遍持金剛花則見金剛法堅結金剛劔
能断一切苦遍持金剛輪能転於法輪所有諸仏語

となり、三行目の「劔」は「劍」である。表裏とも一行二十字詰ということになる。

阿弥陀経と無量義経はそれぞれ一片づつであるが、(33)の阿弥陀経については、表面では縦横ともにかすかにあたりが認められる。罫線は縦横ともにないが、経文は縦横のあたりにそって正確に陰刻されている。裏面は縦横ともに墨であたりをつけたのち篦状のものであたりをつけるが、罫線は縦横ともにない。経文は表面と同様このあたりにそって陰刻されている。焼成は堅質で、側面などに焼成の際の自然釉の吹き出しが認められる。色調は暗灰色を呈する。瓦板表面、側面ともかなりゆがみがある。残る最大縦六・五センチ、横六・八センチ、厚一・一センチである。表の経文は、

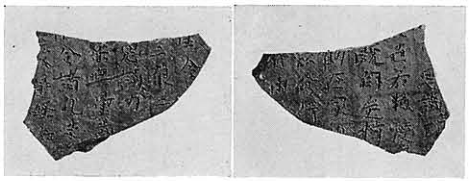
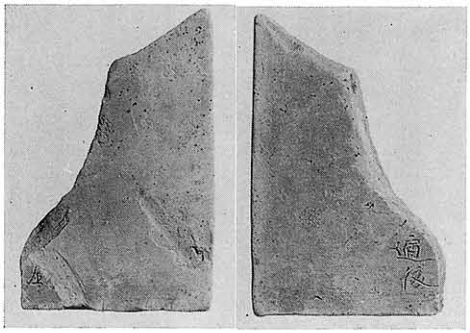


表　(34)　裏



(35)

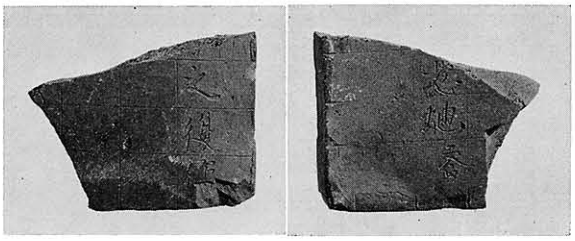
舎利弗於汝意云何彼仏何故号阿弥陀舎
利弗彼仏光明無量照十方国無所障関是
故号為阿弥陀又舎利弗彼仏寿命及其人

となり、一行目の「舎」は「舍」である。二行目の「関」は経典では「礙」とあり誤写であろう。裏の経文は、

民無量無辺阿僧祇劫故名阿弥陀舎利弗
阿弥陀仏成仏已来於今十劫又舎利弗妙
仏有無量無辺声聞弟子皆阿羅漢非是算
数之所能知諸菩薩亦復如是舎利弗彼

となり、一行、二行目の「舎」は「舍」で、二行目の「妙」は経典では「彼」とある。裏の四行目のみが十六字詰となっている。

(34)の無量義経は表裏面とも墨線と針状のものでひいた縦横罫線のなかに経文が陰刻される。残る最大縦五センチ、横七センチ、厚〇・八センチをかぞえる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。表の経文は、



(36)

善男子第十是経不可思議功徳力者若善
男子善女人若仏在世若滅度後若得是経
発大歓喜生希有心即自受持読誦書写供
養如説修行復能広勧在家出家人受持読
誦書写供養解説如法修行既令余人修行
是経力故得道得果皆由是善男子善女人

となり、二行目の「若」は経典では「及」となる。裏の経文は、

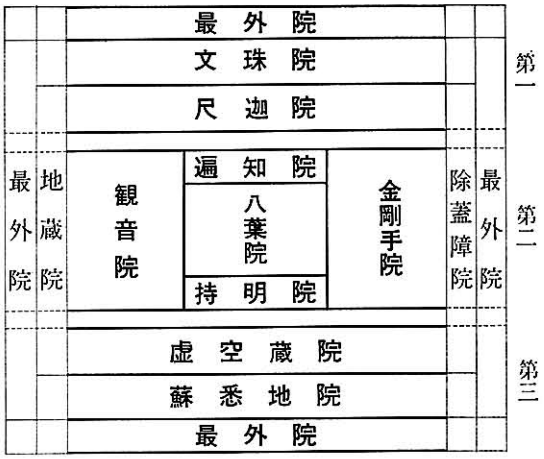
慈被無外摂苦衆生令入道迹是故此人不

久得成阿耨多羅三藐三菩薩善男子是名
是経第十功徳不思議力
善男子如是無上大乗無量義経極有大威
神之力尊無過上能令諸凡夫皆成聖果永
離生死而得自在是故是経名無量義也

となる。

現在のところ経文が少なく経典名を確認できないのが二片ある。(35)の一片は、縦横ともにかなり薄く罫線が認められるがあたりはない。この罫線は磨滅して薄くなったというよりは当初から針状のもので陰刻したのであろう。経文はこれを無視して陰刻される。その裏の表面はかなり磨滅しており罫線らしきものはみあたらないが、当初からこちらの方は罫線がなかったと考えた方がよい。経文は表裏で三字分しかない。残る最大縦一二・五センチ、横七・六センチ、厚一・四センチである。焼成はどちらかといえば軟質で、灰白色を呈する。(36)の一片の一方は縦横にも深いあたりがつけられ、縦横の罫線はそれぞれ縁にまで及んでいるが、もう一方は縦横ともにあたりはなく縦横の罫線がひかれるが縁にまで及んでいる。経文は枠のなかには正確に陰刻されているが、表裏で六字分残っている。残る最大縦四・八センチ、横四センチ、厚二センチである。下欄外幅は〇・五センチ、〇・七センチ、左右欄外幅も〇・五、〇・七センチで、行間は平均一・五センチをかぞえる。焼成は堅質で、暗灰色を呈する。

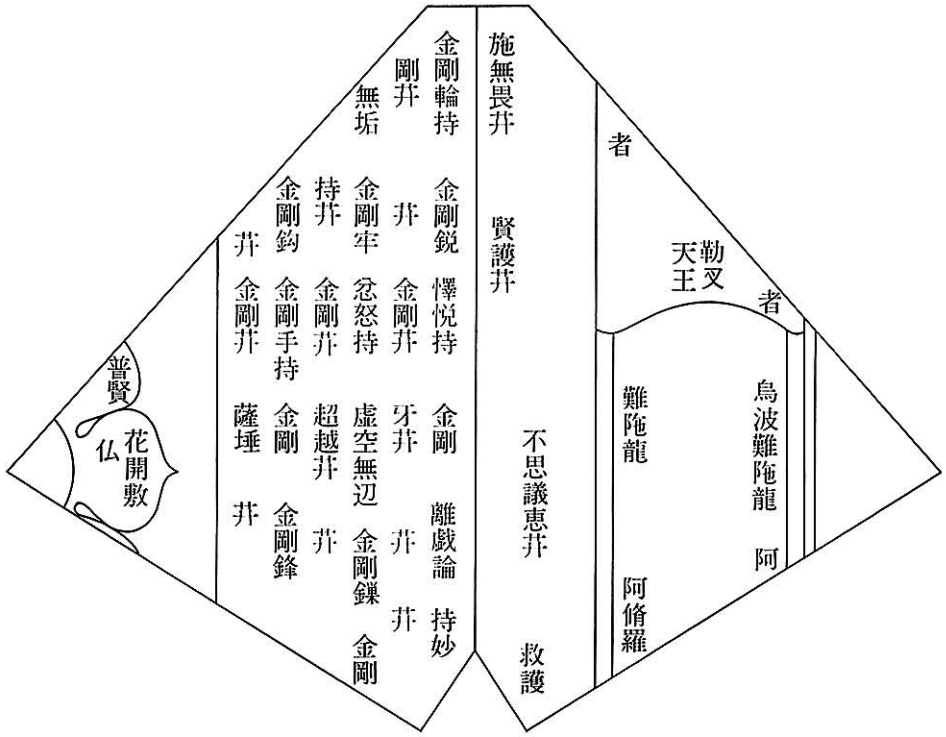
(六)



胎蔵界曼荼羅の瓦板構成（拠・石田論文）

最後に残ったのが(37)の胎蔵界曼荼羅である（口絵図版参照）。これは瓦板の約四分一程度の小破片で、残る最大縦一三・九センチ、横八・六センチ、厚は平均一センチで、焼成は堅質、黒灰色を呈している。瓦板は焼成の関係でかなりカーブしている。この大日寺瓦経のなかに、金剛界曼荼羅、胎蔵界曼荼羅があり、このことについて石田氏は、金剛界曼荼羅は現存する四印会・一印会・理趣会を一連にする一枚の瓦板があることによって、三会づつ三枚に作ったと推定され、さらに胎蔵界曼荼羅については、右図に示したように、「少破片で復原するに、三枚の瓦板の表に太線ゴジックの如く描きこれに入らぬ細線明朝体の部分はそれぞれの瓦板の裏に廻して描かれている」と述べ[9]、この胎蔵界曼荼羅が三枚の瓦板で構成されていたことを指摘されている。この小破片は石田氏のいう第二の一部であり、表面が八葉院、金剛手院の部分と、裏面が除蓋障院と最外院の一部である。この残る部分を表裏あわせて図示したのが左図である。除蓋障院にはこの破片では、施無畏、賢護、不思議慧（瓦板では慧は恵と陰刻される）、救護の諸菩薩がみえる。このうち救護について、阿闍梨所伝曼荼羅によると、悲愍慧を哀愍慧、救意慧、救護慧ともいうとあり、この救護も

確認できる。最外院の「勒叉」とある一字上の半分欠けた文字は「留」と読め、そうすると「毘留勒叉」であり、増長天のことである。最外院には忠実にくぐりの南門をつくり、そこに難陀龍と烏波難陀龍の二龍王と阿修羅が確認できる。



(七)

以上、本館蔵の出土地不明の三十八片の瓦経からこのような結果を得た。石田氏の指摘された瓦経の規格やそのテクニックは四種類以上あるということが瓦板を精査して判明した。このことは、この三十八片の瓦経が大日寺瓦経ではないという意味ではなく、このことが大日寺瓦経の特徴を表わしているのだと考えられるのである。この大日寺瓦経とそれ以後の瓦経を比較すると、規格などについては統一されてきているようであり、経典の種類によって瓦板の大きさを変えるという大日寺瓦経の場合と異なっている。ここで大日寺瓦経の規格を考える前に、まず永久二年(一一一四)の飯盛山瓦経を取り上げ、その問題点を抽出したい。本館にはこの飯盛山瓦経の完形品が二面[10]あり、その規格寸法をみると、縦二三・二センチ、横一八・七センチ、厚一・八センチで、もう一面は縦二三・二センチ、横一九・二センチ、厚一・六センチであり、この二面がほぼ同寸法であったことがわかる。上下欄外幅、左右欄外幅、行間とほぼ同寸法であり、特に横罫線をひくに際して、天の場合には罫線よりすこし下方、地の場合は罫線よりすこし上方の四隅に錐状のものであたりをつけ、そのあたりに沿って線引きがされていることがわかる。こうしたあたりの位置は他の飯盛山出土という瓦経でも確認されるので、すべての飯盛山瓦経とは言えないが、罫線をひく際の一つの特徴ともみることができる。欄外には「五十四」「七十」という数字があり、これは妙法蓮華経の巻五の一四枚目、巻七の十枚目という丁付の記載である。このことに関係して三十八片の瓦経をみると、

三十八片のうち墨であたりをつけたり墨線がひかれたりしているのは、妙法蓮華経六片、阿弥陀経、無量義経各一片の八片で、それ以外には認められなかった。罫線のひき方についてもかなりの種類があり、欄外に記載された丁付は墨書の「二第十三枚」とあるのが一片で、その他のはすべて小口に、「蘇悉地」「悉地」「悉地中之十一」「交了」「妙法」「交了」「頂中之七　校了」「一之九」などが記載さ

小口の陰刻銘

れていた。飯盛山瓦経の場合にはこのような丁付記載の位置もほぼ定まっていたようであるが、大日寺瓦経の場合、この三十八片でみるとすこし異なる。いずれも小破片であるのでここにみる記載だけでなかったともいえるが、蘇悉地経については、「中之十一」とかさきの「中之十」と、その巻上、中、下の記載とともに何枚目という枚数まで示しているのであり、金剛頂経も同じスタイルをとっている。小口へ記載の際には、「金剛頂」「蘇悉地」と経を表現せずにすぐ巻、枚数を記している。妙法蓮華経の場合には、「妙法」「一之九」という記載であるが、「妙法」の方はさきにふれたように欄外に巻、枚数を墨書した関係で小口に妙法とのみ陰刻されたのであり、「一之九」の方は上部が欠失しているのでよくわからないが、「妙法一之九」というさきの蘇悉地経のスタイルがとられていたものと予想される。「交了」と「校了」は同様の意味である。このようにこの三十八片のうちの八片の小口側面の記載をみても、飯盛山瓦経から較べると丁寧であり、石田氏の指摘されたこととも合致し、丁付の記載方法からでも大日寺瓦経であったことが納得されるであろう。

十二世紀の瓦経は、大日寺瓦経とその焼成度を比較してみると、かなり軟質に仕上げられている。勿論、大日寺瓦経にも軟質のものもあるが、かなり瓦板がカーブするほど高温度で焼成された堅質のものが多い。さきの七片の妙法蓮華経をとってみても、瓦板の規格、焼成などがかなり異なっており、こうしたことは他の瓦経ではあまりみられない。このことは、なぜ瓦経がこの種の大きさで製作されたのかという問題をも含んでおり、ここで仮説として考えておきたい。上の表は石田氏が明らかにされた大日寺瓦経の寸法の一覧

瓦経分類	縦	横	厚	縦	横	厚	横瓦板法量
	寸	寸	寸	センチ	センチ	センチ	センチ
伯耆大日寺Ⅰ類	7.1	9.0	0.5	23.43	29.70	1.65	62.70
Ⅱ類	5.9	6.1	0.3	19.47	20.13	0.99	42.24
Ⅲ類	6.5	6.5	0.3	21.45	21.45	0.99	44.88
Ⅳ類	5.6	7.7	0.3	18.48	25.41	0.99	52.80
Ⅴ類	6.4	6.4	0.3	21.12	21.12	0.99	44.22
Ⅵ類	7.0	7.6	0.4	23.10	25.08	1.32	52.80

瓦板法量（拠・石田論文）

表であるが、右の欄は瓦板の表裏、側面をすべてプラスした横の寸法である。こうしたことを提示するのは、さきの飯盛山瓦経の横全長が四一・八センチ、四一センチで、この寸法などが平安時代後期の料紙の一紙分にほぼ相当するのではないかと推定したことによる。勿論、瓦板は焼成される関係で焼ちぢみもあり正確なデータとはいい難いが、当時、瓦経を製作する段階で瓦経の寸法について、この料紙の寸法がかなり意識されたのではないかと考えられるのである。行間をとってみると大日寺瓦経の場合にはかなり出入りがあるが、飯盛山瓦経などは平均すると一・八センチであり、これは当時の経巻などと同寸法にちかく、かなり意識されていたのであろう。大日寺瓦経については、その多くに横罫線がひかれ、縦罫線とでできた四角の枠のなかに経文が陰刻されているが、こうしたことは他の瓦経にはほとんどなく、縦罫線と上下欄がつくられるというのが一般的である。本稿では、経文と経典を校合して、その復原的な寸法もある程度は確認できたが、瓦経によっては行間、左右欄外の幅などの寸法にかなりの出入りがあり、大日寺瓦経の瓦板そのものの研究は、他の瓦経のそれ以上に重要だと考えられるので、ここではあえてその寸法を示さなかった。

この三十八片の瓦経の経文の誤写については『大正新脩大蔵経』と校合してそのつど訂正したが、すこし認められたし、経典で改行しているところが改行されなかったり、その逆の場合もあったりしたが、経典をかなり忠実に陰刻していることについては、その復原で明らかとなった。こうした瓦板にどのように書写陰刻したのであろうか。まず瓦板を作り乾かないうちに罫線や経文が陰刻されたのであるが、このことを考える素材として出土地不明であるが提示しておきたい。この瓦経は今のところ経典名は明らかにしえないが、罫線が墨線、経文が朱書という面と、もう一方は罫線と経文が陰刻されるという瓦経である。この瓦経から類推されることは、片方は先に墨線、朱書された罫線と経文を錐状のもので陰刻したが、もう一方についてはその時に瓦板面を陰刻することができず、そのままの状態で焼成されたのではないかと思われるのである。勿論この墨線と朱書があり、陰刻するというのが当時のスタイルであったと考えているわけではなく、経典をみながら書写陰刻された場合もあるようで、大日寺瓦経については他の瓦経と較べて瓦経の表面がかなり書写の際についたと思われる手こすれがある。それによって経文が判読できないものもあり、今後はこうした書写陰刻の方法を注意しなければならないであろう。

最後に網干氏が注目された執筆者について考えておきたい。さきの本館蔵の飯盛山瓦経の一面の小口に「僧慶禅手」という陰刻があ

り、これを執筆した僧が慶禅と考えたが、[11]三十八片のなかにはこの種のものはなかった。網干氏は、大日寺所蔵の瓦経のなかに「僧教□」「漢部熊童丸」「□筆者　僧□」という陰刻が小口にあり、さらに倉吉市立博物館所蔵の瓦経に「僧泉豪別願也　三　校了」とあることなどから執筆者の問題にふれられた。勿論、執筆者はこれだけでなく、銘文からみれば、延久三年二月から五月の四ヵ月で、総数四二七枚を書写して焼成しなければならないのであり、かなりの人数が必要であったと考えられる。確かにこの三十八片の瓦経で筆跡を比較してみても同一筆者と思われるものを抽出してみるとあまりなく、最低十人以上であったと予測されるのである。

むすび

本館蔵の三十八片の瓦経について、その品質形状、経文の校合を中心にみてきたが、規格などから考えてこれらが大日寺瓦経であることは肯定されよう。石田氏も指摘されたように、大日寺瓦経はその規格といい、それ以後の瓦経からみればかなり先駆的なものであり、このことは現在、この大日寺瓦経が最古の紀年銘を有することを納得させるのである。網干氏の指摘にもあるように、この大日寺瓦経は瓦経研究ひいては日本における経塚の成立と展開を考えるうえで重要な位置を占めているのである。諸家に散佚してしまった瓦経を調査することは大変困難なことであるが、こうした大日寺瓦経を丹念に調査していく上で、その正統な位置づけがなされるのである。

〈註〉

1　「瓦経の研究」（『瀬戸内考古学』二―一。のち『筑前愛宕山瓦経の研究』および『仏教考古学論攷』三に所収）。この石田氏の研究はその後の瓦経の復原的な研究についての基となったものであるが、大日寺瓦経に関してはこれを詳細に論じたというものではない。この大日寺瓦経については、『鳥取県史』や『倉吉市史』でも石田氏以上に論述されておらず、『鳥取県史』では、県下の経塚十五例のうち東伯郡東郷町の伯耆一宮経塚（康和五年の経筒が出土している）とこの大日寺瓦経が注目される、と述べている程度である。『倉吉市史』では、本坊敷地から極楽峯に上る小道の右側に瓦経を発掘した長方形の穴があり、この近辺から法華経や大日経が出土し、そのなかに延久三年の紀年銘があったといい、遺跡と遺物については『鳥取県史』よりは詳しく論述されている。

2　遺跡は二十五、六ヵ所というが、埋納されていた瓦経が一～十片前後という報告の遺跡が多い。

3　この発掘調査は昭和三十三年に行われたが、安養寺は昭和十二年頃に瓦経が発見されており、この経塚を一号経塚、発掘で応徳三年（一〇八六）の紀年銘瓦経が出土した経塚を三号経塚と呼んでいる。

4　網干善教氏「伯耆大日寺出土の瓦経について」（関西大学『文学論集』第二十八巻第三号）

5　網干善教氏「関西大学考古学資料「瓦経」片の復原―秘密三経について―」（柴田実先生古稀記念『日本文化史論叢』）同氏「国学院大学蔵「瓦経」片の復原研究」（『国学院雑誌』第七十八巻九号）

6　昭和四十四年三月購入分（J甲二七九）。

7　註1に同じ。

8　東京国立博物館蔵の大日寺瓦経のなかに願文があり、「于時釈迦如来末法延久三年歳次辛亥記者遍照金剛」と願意が誌され、「願主金剛弟子成縁」とあり、僧成縁が大日寺瓦経の願主であったと考えられている。

9　註1に同じ。

10　J甲二六八とJ甲二八〇。このうちJ甲二六八については同じ福岡県

の四王寺山出土ということであったが、その後の調査で飯盛山瓦経であることが確認された。難波田徹「瓦経資料二例」（『史迹と美術』四七九号）

11　註10に同じ。

大日寺瓦経（妙法蓮華経序品）表・裏　奈良国立博物館蔵